



1988-10

No.241

【表紙】

江戸小紋 菊格子
小宮康孝
1985年作

・解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

特集：オーケストラ

今日のオーケストラと その歴史	藤田 由之	4
音の蔭	岩城 宏之	8
オーケストラ・ディレクターの 泣きどころ	長谷 恭男	11
日本のオーケストラ 世界のオーケストラ	文化庁芸術課	14

—ぶんかブンカ—

ウィーンでのオペラ『椿姫』に めぐり会って	山崎伸子	18
—在外研修員として得たもの—		

—都道府県のページ—

(我が県の文化行政⑩)		
富山からの文化メッセージ	富山県	19
(特色ある文化活動⑩)		
世界へむけての挑戦	湯布院映画祭	22

—文化庁だより—

(報告)		
中国帰国者に対する日本語指導者研修会及び 日本語指導研究協議会、日本語教育研究協議 会の開催		24
(文化庁ニュース)		
文化庁の昭和64年度概算要求まとまる		25
(展覧会紹介)		
日本の考古学—その歩みと成果—		28
畿内と東国—埋もれた律令国家—		28
現代イギリスの工芸		29
日本のアニメーション		29

- 文化庁行事報告及び予定 30
- 国立劇場ニュース 31

今日のオーケストラとその歴史

音楽評論家

藤田由之



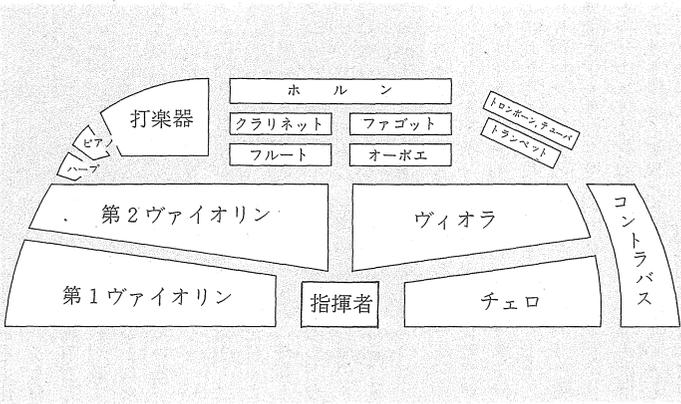
オーケストラの構成と演奏形態

現代の人びとにとっては、オーケストラの存在は、かつてほど速いものではなく、いろいろなメディアを通じて、視覚的にも聴覚的にもそれに接する機会が増大しているからである。もちろん、オーケストラが、ある規模以上の器楽の合奏体であるという点だけからいえば、そこにはかなり多様な形態も考えられるが、ここでは、オペラやシンフォニーの演奏に携わるごく一般的なオーケストラについて見てみることにしよう。

現代の基本的なオーケストラの規模は、長い歴史を経て一応整理された段階にあり、八十名前後から百十名程度の奏者を、バランスのとれた楽器編成によって常備しているのが普通である。楽器の種類は、ヴァイオリン(通常二群に分かれる)、ヴィオラ、チェロ、コ

ントラバスの四種の楽器を中心とする弦楽器群、フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、トロンボーン、テューバなどの金管と

による管楽器群、ティンパニをはじめとする各種の太鼓、シンバル、トライアングル、カスタネット、木琴、鉄琴などかなりの種類をもつ打楽器群、それにハープ、ピアノなどに大別されるが、それぞれの楽器、特に管楽器には親族をなすものがあつて、ごく一般的にみてもかなり多形である。例えば、フルートの属のピッコロやオーボエ属のイングリッシュ・ホルンをはじめとして、ピッコロ(変ホ調)クラリネット、バス・クラリネット、コントラファゴットなどの木管、コルネットやワグナー・テューバなどの金管がそれである。それに鍵盤楽器にはチェレスタやオルガンが加えられることもあるし、打楽器にいたっては無限といつてもよいほどの種類が考えられる。また、ウィンド・マシーンや鳥の啼き声



は、すでにスライドをもつていたトロンボーン以上に演奏上の制約が大きかったからである。ティンパニ以外の打楽器には、軍楽的な役割が当初は濃かったが、それもアクセントを与えたり、リズムや音色を多彩にするためにその種類を増やしていった。今世紀の作曲家たちは、打楽器を多用することによって

新しい響きを求めるような傾向もみせている。また、弦楽器や管楽器に対しても、特殊な奏法を要求することによって、新しい音響を生み出すことも試みられている。

ステージ上でのオーケストラの配置は、楽団や指揮者の好みによってかなりの違いも見せているが、弦楽器群を指揮者を囲むように前面に配置し、その後ろに、木管を中央にして金管や打楽器を適宜配置するという方法が、最もスタンダードなものとなっている。上の図はその一例であるが、第一ヴァイオリンと第二ヴァイオリンとを指揮者の両側に置くのもよくとられている。それは、もともと歌劇場のピットにあつたオーケストラをステージに移したことの名残りともされているが、それを図のように音域順に配置するようにしたのはストコフスキーであつたといわれている。ハープなどは、下手側の中間に置かれることが多いが、音量的なことも考慮して弦楽器の外側に出すこともある。一方、近代以降の作品の中には、楽器が多様化されているばかりでなく、楽器の配置についても特別に指定されたものがあり、オーケストラは、いろいろな面から、多様で多彩な表現力を求められるようになってきているともいえる。

オーケストラの誕生とその歴史

ところで、オーケストラの歴史は、その呼び名からいえば、古代ギリシャ劇の上演で舞

を求めた作品などもあつて、実際には、オーケストラの表現機能は、極めて幅広いものになって拡大されてきている。とはいえ、楽団は、主として古典派から現代にいたるスタンダードなレパートリーを中心に常備されているのが普通であり、特殊な要求に対しては、エキストラの奏者も加えて、その都度対応する姿勢をとっている。

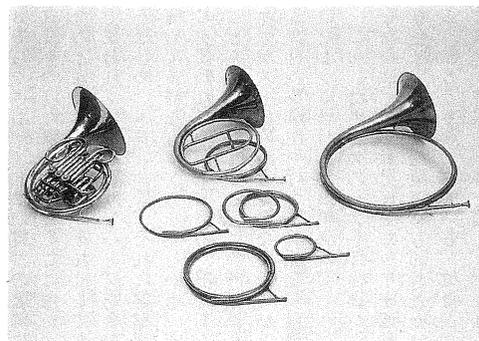
ヴァイオリン属を中心とする弦楽器群は、長い間オーケストラの主体となってきたが、それは、それらが、等質の音によって広い音域を支配することができ、また幅広いダイナミクスと、論理的には長い音を不断にひき続けることができるというような機能をもっているからであろう。木管楽器は、個々の音色がかなり異なることから、旋律線やリズムなどに多彩な音色的変化を与えるために用いられることが少なくない。そして、組合せによって、それはもつと多様な音色を生み出すことにもなる。金管楽器の中では、ホルンだけが、どちらかといえば木管に近い役割を早くから与えられてきたし、初期古典派の頃までのオーケストラの管楽器としては、オーボエとともに中心的存在をなしていた。トランペットは、徐々に旋律や複雑な楽句を演奏するようになってきたが、当初は、どちらかといえばファンファーレ風の扱いや、ティンパニとともに音楽にアクセントを与える役割が強かった。それは、十九世紀前半にヴァルヴ(ピストン)が実用化されるようになるまで

台と観客席との間に位置する場所を「オルケストラ」と呼んだことまで遡れるが、今日のいわば演奏団体としてのオーケストラの歴史としては、オペラの起源にまで遡れば充分であろう。このオペラとオーケストラとの結びつきは、一六〇〇年代初めにフイレンツェでギリシア古典劇の復活が図られ、その歌詞に付随して器楽の伴奏が加えられたことから始まった。一六〇七年に初演されたモンテヴェルディの「オルフェオ」の総譜には、その際のオーケストラの詳細が記録されており、そこには、十四種ほどの楽器に三十六名の奏者が加わっていたことが明らかにされている。この人数の大きさには驚かされるが、それは、おそらくオーケストラが舞台の裏側に置かれ、衣装をつけた歌手たちもそこに加わっていたためと推測されている。それにしても、そこで使われている楽器は、ハープを含む弦楽器をはじめ、木管と金管、それに鍵盤楽器など極めて多様なものがあり、しかも、そのすべてが使われたのが全曲中の一部であるということを考えあわせると、この時期からすでにオーケストラの最も重要な要素のひとつである音色の多様性や対比感がかなり意識されていたように思われて興味深い。

こうしたオーケストラを舞台裏から引き出したのは、十七世紀後半にルイ十四世の寵愛を受け、その宮廷楽団をも託されたリュリであったろうといわれている。彼は、この楽団にスパルタ式の訓練を施し、アンサンブルを

整える一方、その作品では、弦楽四部を主体とする基本的なオーケストラレヴェーションをも確立した。しかし、バロック期に各地に存在していたオーケストラの記録は、それらが必ずしも今日考えられるようなバランスのとれた編成のものではなかったことを伝えている。それは、おそらく目的や楽器の機能など、いろいろな条件によつたものと思われるが、こうした文字通りのバロック的な時代を経ると、オーケストラは、次第に、使う楽器の種類も整理され、数の上でも均衡のとれたものとなつていった。例えば、モーツァルトの頃のオーケストラには、それが歴然としていた。弦楽器群の運弓法を揃えたり、正確なアクセントやフレージングを与えて奏法を統一し、グレンディンやディミナンドを駆使してアンサンブルと演奏効果を高め、オーケストラの近代化に重要な役割りを果たした一七七〇年代のマンハイムの楽団や、彼に「パリ」交響曲などを作曲させたパリのコンセル・スピリチュエルなどは、当時の最も充実したオーケストラとして整つた規模をみせていた。一七九〇年代にハイドンが二回にわたつてロンドンに招かれた際には、すでに弦楽器だけでも四十名近い編成をもつたオーケストラが、その演奏を受け持っている。古典派時代のオーケストラは小人数であつたというのが一般的な通念になっているが、実際にはかなり多様で、セイヤーは、一八一四年のウィーンでのベートーヴェンの演奏会では、七十九名

の弦楽器群が使われたとも伝えている。一七四三年に室内楽的な規模で発足した世界最初の民間人の手になるオーケストラとも考えられるライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団は、一七八〇年代からハイドンやモーツァルトの作品を演奏し、後にはベートーヴェンの作品も積極的に取り上げたが、現存する最古のフィルハーモニック協会となつたロンドンのロイヤル・フィルハーモニック協会は、一八一三年に創設されており、一八四二年には、ウィーン・フィルとニューヨーク・フィルとが発足した。その間一八二八年には、パリ音楽院管弦楽団も創立されており、世界的にオーケストラ隆盛への傾向が示されているが、その一方で、オーケストラの機能的な近代化は、楽器そのものの改良発達によつても促されている。それらの中で最も重要なものは、フルートの音量増大をもたらした木管楽器でのベーム式の開発と、金管楽器の半音階的な演奏を可能あるいは容易にしたヴァルヴ装置の発明と実用化とであろう。こうした楽器の改良発達は、当然、作曲家たちをも刺激することになり、ベルリオズをはじめ数多くのロマン派の人びとが、大編成のオーケストラ作品を書くようになり、それに伴つて常設の楽団もその規模を拡充していった。十九世紀後半はその成熟期であり、アムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団は一八八三年に創設され、ボストン、シカゴといったアメリカの主要楽団やベルリン・フィルも、



左から、現代のヴァルヴホルン、ヴァルトホルン（ナチュラルホルン）(19世紀)、狩猟ホルン(18世紀)
(写真提供：武蔵野音楽大学)

それと前後して発足している。そして、十九世紀末から今世紀初頭にかけては、特にアメリカを中心として世界のオーケストラ界はひとつの頂点に達したが、一部の国々の政治的な変革や二回にわたる大戦は、かなりの部分でその力を低下させた。そして、弦楽合奏や小編成のアンサンブルの活動が活発化した。それはまた、今世紀のバロック音楽の復活とも無関係ではない。近年では、大編成の近代のオーケストラと、そうした室内オーケストラとの活動に加えて、古楽器あるいはそのコピーによるアンサンブルやオーケストラの活躍も数多く見られるようになり、オーケストラそのものも多様化してきている。



昭和40年、来日の際のストコフスキーの特殊な楽器配置
(写真提供：読売日本交響楽団)

日本のオーケストラの歴史が、実質的に百年にも満たないという事は、鎖国の時代を経てきた以上、やむを得まい。そして、ペリーの来航は、開国を迫つたばかりでなく、日本の風土に最初に軍楽隊の響きをもたらしたといわれている。その後、幕末に相ついで組織された鼓笛隊や軍楽隊としての吹奏楽団の活動が、日本のオーケストラの歴史をなすものであり、一八七〇年代も終ろうという頃には、当時の宮内省雅楽部の人びとが、早くも西欧的な意味でのオーケストラの組織や運営の研究を始めたということも見のがせないが、その頃発足した音楽取調掛の伝習人たちが

日本のオーケストラの誕生と歴史

が一八八一年に行つた演奏が、日本最初のオーケストラ演奏であつたと見られてはいる。そして一八八七年の卒業演奏会では、ベートーヴェンの交響曲（おそらく第一番）の一部が、楽器編成を縮小して演奏された。宮内省雅楽部は、一九〇七年に楽部と改称し、西欧音楽を併行して取り上げることになつたが、その後は東京音楽学校のオーケストラにも協力し、重要な一部を占めた。鹿鳴館での舞踏会やコンサートを含めた政府側の活動に対して、一八八〇年代後半には、民間の動きも始まり、横浜グラント・ホテルを本拠とした東京（後に東洋）市中音楽会が発足し、一九〇九年頃からは、学生オーケストラの組織も相つぎ、また、東京日本橋の三越と名古屋の松坂屋とに少年音楽隊が結成された。後者は、現在の東京フィルハーモニー交響楽団の基礎ともなつたものである。

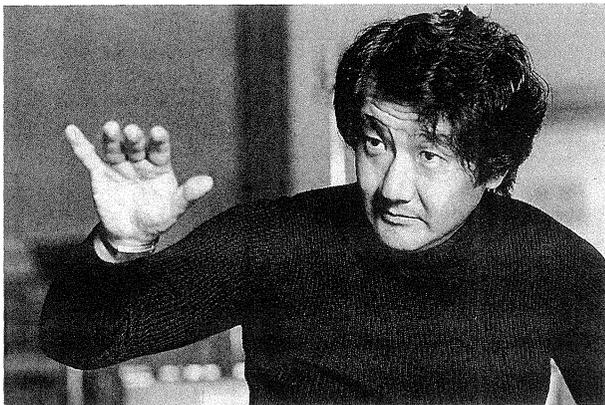
一九一五年には、山田耕筰指揮の東京フィルハーモニー会が、日本最初の定期（予約）演奏会の形で出発しながら、その年一杯で挫折したが、これは、日本の本格的なオーケストラ活動への強い刺激とはなつた。また、この頃から、大阪、京都、宝塚、札幌等で、オーケストラが組織され始めている。一九二〇年代には、いろいろな形で楽団が生まれ、そして消えていった。なかでは、一九二五年の山田と近衛秀麿との指揮による日露交歓管弦楽演奏会が忘れ難い。日本に本格的なフル編成のオーケストラの音を響かせたからである

が、この二人は、翌年には日本交響楽協会の予約演奏会を発足させ、その年十月には、山田と袂を分かつた近衛は、新交響楽団を創立し、その後、約十年にわたつて私財を投じて、その運営と指揮を続けた。それが後に日本交響楽団となり、現在のNHK交響楽団となつたことはいまでもあるまい。その間にも、東京音楽学校のオーケストラや他の楽団の活動が見られたが、一九三五年には名古屋の松坂屋シンフォニーが東京に進出した。一九三六年からは、新響はローゼンシュトックの時代を迎え、一九三九年発足のコンセル・ポピュレールは青年日本交響楽団、一九四〇年創立の中央交響楽団は東京交響楽団、一九四二年発足の松竹交響楽団は大東亜交響楽団とそれぞれ改称し、戦時下の色を強めていった。

戦後の日本のオーケストラ界については、詳述を避けるが、一九四六年には、東宝交響楽団が発足し、間もなく現在の東京交響楽団となり、また、現在の群馬交響楽団の基となる高崎市民オーケストラも発足した。翌年には、現在の大阪フィルハーモニー交響楽団の前身である関西交響楽団も結成されている。それから約四十年、日本のオーケストラは、数の上でも質の上でも、大きな飛躍をみせた。地方の楽団の充実も見のがせないが、全国に散在する膨大な数のアマチュア団体の活動も無視できないものがある。しかし、この隆盛を真に実のあるものとするためには、多くの人びとに実態を知ってもらう必要もあろう。

音の蔭

指揮者 岩城宏之



世界中どのオーケストラでも同じだが、初めて指揮するとき、まず最初にほかが注目するのは、その団体の裏方である。

最近では初顔合わせのケースが少なくなってきたけれど、世界はやはり広いもので、一シーズンに必ずひとつか二つはある。有名なオーケストラでもひどく荒れていて、まるで「昔の名前で出ています」だけの団体がある。

なにしろ初めてなのだから、実際に音を出してみなければ、そのオーケストラのレヴェル、意欲、集中力、ディスプレイはわからない。もちろん大部分がこちらの力量にかかっているわけだが、レヴェルだけは、客演指揮者にはどうしようもないことだ。

大低の場合、初めてのゲストを迎えて意欲満々、という雰囲気を感じるものだが、中にはそんなことには全く関心がなく、ただもうその日のスケジュールを面倒くさそうにこなすばかりの、荒廃したオーケストラもある。二、三十年前の名演のレコードを当てにして

いると、とんでもないことになる。

実際にリハーサルを開始する以前の接触は、事務局長や楽譜係、それに裏方のチーフである。裏方さんは自分のオーケストラの伝統的楽器配置について説明し、こちらの要望との接点を見出して、指揮者室から出ていく。やがて時間がきて、ほくを指揮台へ案内するために迎えにくる。この裏方さんの態度、感じ、キャラクターで、ほぼ百パーセント、オーケストラのレヴェルがわかるものだ。

一流の団体には、必ず一流の裏方がある。逆もまた真であって、二流には二流の感じのひとがいる。だから裏方さんとの初対面で、こちらはそのオーケストラに対する覚悟というか、作戦計画をたてるわけだ。

ほくの知る限り、世界最高の裏方は、もう引退したが、ベルリン・フィルハーモニーのバルトロークさんである。本当に素晴らしかった。ほくは彼のファンだった。ベルリン・フィルとの仕事の度に、指揮をする嬉しさは当然にしても、むしろバルトロークさんとまた付き合える喜びの方が、大きかったような気持ちさえる。

一度、日本の若い指揮者の卵二人に付き添われて、楽屋入りしたことがあった。要するに、ホテルから靴を持ってもらったのである。ほくには開演二十五分前、燕尾服に着替える習慣というが、癖がある。

まだ時間があったので、若い二人に自慢話めいた教訓(?)をたれていた。ほくはなん

でもかんでもスベア人間で、サスペンダーとか白の蝶ネクタイ、サッシュ等、およそ千切れたりこわれたりする可能性のあるものは、必ずスベアを持っている。燕尾服ももちろん二着携帯である。腕の付け根がビリッと裂けたらどうする。指揮棒のスベアは当たり前だが、仕事に必要なものにはこのように用心するべしと、エラソウにぶっつけたのだった。

時間がきた。さあ着替えよう。ヤヤッ、大変だ！燕尾がない。忘れてきたのだ。

「タ、夕頼む。ホテルに取りにいってくれ」

それまでの威信もクソもない。二人はすっとなで出て行った。

同時にバルトロークさんと呼んだ。慌てふためいて、

「燕尾服を、ホ、ホ、ホテルに……」

と言っただけで、彼は全てを了解して、受話器を取り上げた。

「こちらはベルリン・フィルハーモニー。若い日本の男が二人行くから、イワキさんの部屋の鍵を渡してやってくれ」

そう告げたのだった。

二人は車を持っていないし、いったいどうやって多くのホテルにすっどぶのだろう。本番まで、もう二十五分を切っている。演奏会用のシャツに蝶ネクタイをつけ、下はジーンズという珍妙な姿で、イライラ待つ。

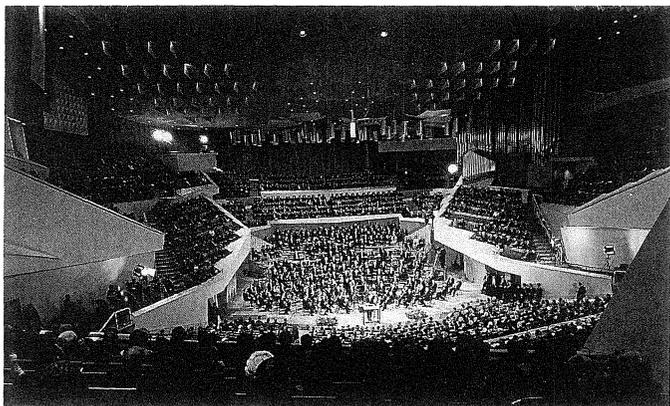
二、三分おきに、バルトロークさんが部屋に現れる。太い大きな、しかも優しい声である。

「リラックス、リラックス。もし間に合わなくても、そのお姿でいいじゃありませんか。お客は音楽を聴きに来ているんですから。お気楽に、お気楽に、ハハハ……」

時が切迫するにつれて、彼の声はより優しくなるのだった。

「着きました！」

開演時間ジャストだった。ズボン履き、



ベルリン・フィルハーモニーの館内 (写真提供：在日ドイツ連邦共和国大使館)

上着を着る。燕尾姿が完成した。ヨーロッパでは、どのオーケストラも、お客の静まるのを待ってから始めるから、音出しは五分遅れが普通である。バルトロークさんがコーヒーを持ってきた。

「ちょうど雨が降り出したので、お客の入场が少し遅れています。まあコーヒーでもごゆっくり」

ウンときままっている。ほくの気持ちを落ち着かせるため、彼は開演を知らせる鐘のベルを、十分遅らせたのだった。

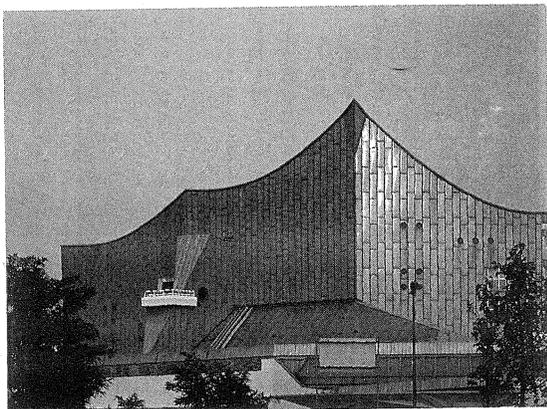
一度、新品のステージ靴を持っていったことがあった。張り切っておニューを用意したのだったが、まささらな靴の裏は、とても滑りやすいのだ。ハタと思いついた。バスルームのかいたオルをびしょびしょに濡らし、指揮者室のドアをちよつと開けた。ベルリンのフィルハーモニーホールは、ここから左の方十メートルぐらいに、舞台の袖がある。

間髪を容れず、バルトロークさんがとんできた。本番の十分分くらい前から、彼はステージ脇のところで、指揮者室のドアを常に凝視しているのだ。ドアが一寸開いただけで、彼は駆けつけてくる。

「あのう……」

「ヤー、ヴォール！」

会話は一切なしである。あれで何がわかったのか、少しばかり心配だったが、ステージに出るとき、ほくが思いついた通りになっていたので感心した。いや、感動した。ステ



ベルリン・フィルの夜景 (写真提供：在日ドイツ連邦共和国大使館)

「ハイ、右に曲がります。ハイ、二段降ります。ハイ、左に曲がります。エレベーターを待ちます。二重ドアですから、ごゆっくり。外は冷えますから、肩にオーヴァーコートをお羽織ってください……」

いつも、いつも、何十回も同じことを繰り返す。カラヤンを含めて、全ての指揮者が演奏会のと、どれほど痴呆状態になっているか、このひとほど把握していたプロフェッショナルは、いなかったと思う。

わが国にも天才的なアプロの裏方がいた。元NHK交響楽団の延命千之助さん、元新日本フィルハーモニー、現在サントリー・ホール裏で活躍中の宮崎隆男さんである。

宮崎さん——マーチンには、いつもびっくりしたものだ。ステージから戻ってるとき、冷たいおしぼりで顔を拭きたいなあと思っていると、ちゃんとそれを持って待っている。乾いたタオルが欲しいと思いつつ袖に辿り着くと、気持ちのよい乾いたのが、顔にかぶせられる。いったいどうやって、こちらの気持ちを打破るのだろうか。

日本中、優れた現役の裏方さんが何人もいる。例えばN響の、上村さん——通称シゲサである。こういうひとたちが裏で助けてくれるオーケストラだと、安心して心おきなく指揮だけができる。若い世代には、まだこれほどの人物が育っていないように思われる。しかしこれは無理もないことではある。指揮者の心理状態を打破るには、よほどの

のキャリアが必要だろう。そして、生来の「小屋感覚」ともいうべき才能が要る。

バルトローグ、延命、宮崎さんたちに共通するのは、舞台の裏で働くのをこよなく愛し、立派な音を舞台で出さしているのは自分たち

「音の蔭」だという、自信と誇りなのだ。日本中に沢山の後継者が出てほしいと、切に願う。音楽家のレヴェルアップはもちろんのことだが、最初に書いたように、優れた裏方がいて初めて素晴らしいオーケストラが存在すると思うのだ。「音の蔭」のおかげで、われわれは「音の表」になれるのだ。

これまで書いたのは、あくまで指揮者から見た裏方像であって、バルトローグさんを始めとする天才的裏方たちは、オーケストラ全員の心を見通している。だからこそ、かれらあつてのアンサンブルなのである。

ステージをつくるひとたち、楽器を傷めずに運搬するひとたち、入り口で大勢のお客を混乱なくさばっている切符切りのおばさんたち……多くの「音の蔭」なしに、聴衆は音楽を楽しむことはできない。

「蔭のひとたち」はもともと光を当てられるのを好まない。しかし別の光を、もっともつと当てたいものである。より良い待遇を、という意味だ。

指揮者としてオーケストラの「音の蔭」についてだけ書いたけれど、演劇をはじめ、全ての芸術、興行の「蔭」に突りある光を、と叫びたい。

オーケストラ・ディレクターの泣きどころ



東京フィルハーモニー交響楽団 常務理事 長谷恭男

戦前のアメリカ映画に「オーケストラの少女」というのがあって、当時中学生の私は何度もこの映画を見に行った。話の筋はスポンサーに見放され、失業したオーケストラの楽団員——あるトロンボーン奏者の娘が、このオーケストラを救おうとして著名な指揮者スコフスキーに出演を頼みに行く。スコフスキーは戸惑うが、少女のひたむきな願いに、ついほだされて出演を引き受ける。失業に打ちひしがれていた音楽家たちは、夢のような巨匠の出現に、眼を輝かせて練習を始めるのである。

燕尾服、イヴニングドレスに身を整えたオーケストラも、一步舞台裏に廻れば火の車、交響楽団の経営が大変なことは古今東西、変わりはないようである。

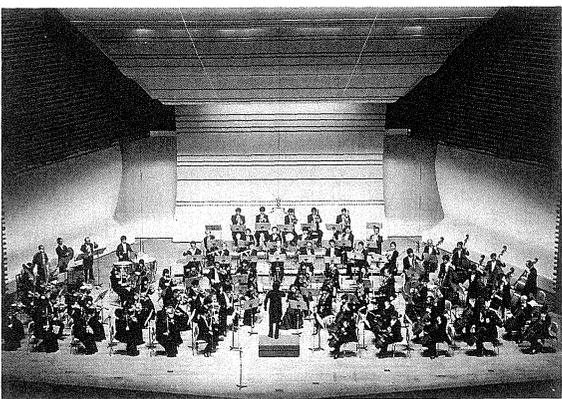
オーケストラが経済的に自立できない存在であることは、その揺籃期、十七世紀以来、宮廷や国家、都市の手厚い保護のもとに育って来たという、歴史の証明するところである。

近年、文化庁や地方公共団体、財界の指導的な立場にある人々が、苦悩する日本のオーケストラに、何らかの援助の手をさしのべるべきだという思想を持ってくださる傾向にあることは、我々当事者にとっては誠に有難いことであり、同時にその御好意に対し責任を痛感するのである。

オーケストラは何故、金がかかるのか

オーケストラを運営してゆくには、ステージでは眼に見えない、莫大な経費が要るのである。

ひとつのオーケストラを編成するには、中堅どころの規模で、九十人の楽員と十人位の事務局員、合わせて百人の職員が必要である。そして、最小で七十坪の練習所と二十坪の事務室を確保しなければならない。この練習所は、大きな音を出す関係から、完全に防音、これに伴って冷暖房完備、しかもあまり都心



東フィル演奏風景

から遠くでは困る、天井は高く、出来れば駐車場も欲しい——となると、今どき、そんな建物を入手することは至難である。現在日本で満足すべき練習所を持つているのはNHK交響楽団と東京都交響楽団、それに九州交響楽団ぐらいのもので、N響はNHK、都響は東京都、九響は地元の有識者の好意で提供されている。東京フィルは虎ノ門の寺院の会館を有料で借りているが、寺の行事があれば使用不能、夜間は近所の迷惑になるから使用禁止である。専用の練習所を持つオーケストラ

に對し、持たないオーケストラは、大きいハ
ンディを背負うことになる。この深刻な問題
に對して、最近、新宿在住の奇特な方から、
東京フィルのために練習所を提供してもよい
という御申出がある。これは誠に有難い話で
ある。

次に必要なものは楽器である。ウィーン・
フィルのように、すべての楽器を楽団が用意
することは日本では考えられないが、コント
ラバス、ティンパニ、ハーブ、ピアノ、チェ
レスタのような大型楽器やコントラファゴツ
ト等、特殊楽器は楽団が購入しなければなら
ない。これは直接、音に影響する商売道具だ
から、安物ではダメである。

演奏会をやる上で、絶対に必要なのがホー
ルである。最近、すばらしいホールが続々建
設されるが、その使用料は年々高額となつて
ゆく。公共ホールに比べて、民間ホールの使
用料は格段に高い。地価高騰、建設費の上昇
を考えれば、やむを得ないことも判るが、音
楽会の売上げを、ホール借用料に全部持つて
行かれることも珍しくない。これではオーケ
ストラは「飯の食い上げ」である。東京フィ
ルが渋谷の東急文化村ホールとの間に結んだ
「フランチャイズ契約」なるものは、こうい
う苦境に對する企業の援助計画である。又、
最近多くなつた「冠つきコンサート」も企業
が手を貸して、コンサートを成り立たせる方
式で、オーケストラにとつては有難いことで
ある。



東フィル演奏風景

人間管理の特殊性

帝王カラヤンが、女流クラリネットの名手
ザビーネ・マイアーをベルリン・フィルに入
れようとして、楽団員に反對され、諦めた事
件があつた。音楽監督や理事者には人事権が
あるが、一般会社のとおりは趣が違つてあ
る。新人を採用するには、必ず全楽員のオー
ディションによる同意が必要で、その結果を
理事者が覆すことは不可能に近い。これは自
治を重んじたヨーロッパのオーケストラの伝
統によると思うが、運用を誤ると弊害も出

来る。

オーケストラの楽員は雇用関係がある。し
かし、長年の間には、どうしても技術の低下
する者が出てくる。特に、管楽器奏者の齒
の老化が問題になる。どんな良いオーケストラ
にも必ず、こういう問題の人がいるものだ。
さりとて、技能が落ちたから即、解雇とは行
かない。特に日本のような終身雇用の社会で
は大問題となる。これが会社ならどうするか。
配置転換、閑職に廻す、転勤させるなど、一
時的ながら方策はある。しかし、オーケスト
ラはそのどれも不可能である。フルート奏者
は終身フルート奏者であつて、来月からコン
トラバスをやれといつても無理である。事務
をやれといつても無理だし、事務局は十人も
いれば十分である。第一、閑職などというポ
ストを賄う余裕がない。定年制はこれを解決
する唯一の歯止めになるが、普通のオーケス
トラは退職金を用意する余裕さえないのであ
る。

普通、オーケストラは弦楽六十人、管、打
楽器三十人ぐらいで編成している。これは古
典からロマン派中期迄の「交響曲」の演奏を
想定した編成といえる。ところが、ロマン派
後期から現代音楽となると、全くこの編成で
はカバーしきれない。また、極端な例ではヤ
ナーチェクのシンフォニエッタでは十二人の
トランペットを要求され、逆にストラヴィン
スキーの詩篇交響曲ではヴァイオリン、ヴィ
オラは不要、但し、打楽器いろいろと合唱が



N響練習所での練習風景

交響楽団の東京集中について

日本の交響楽団は全国に二十団体近くある
が、その約半数、九団体が東京に集中してい
る。これは確かに異常であり、過当競争を生
む。よく、私達に向かって、その愚かさを説
く人もあるが、私はそれは酷だと思ふ。その
責任はオーケストラだけにあるのではなく、
日本全体が、何もかも東京に集中した結果だ
と思ふ。ドイツやアメリカの交響楽団のよう
に平均的に各地に存在するのが理想だが、そ

オーケストラを
工場に見立てる

近代産業の飛躍的な発展は、その合理化さ
れたマスプロのお蔭である。ところがオーケ
ストラは全く、合理化、マスプロの利かない
性格のものである。生産工場であつたらぬ商
品は、流通機構に乗って津々浦々まで送られ
各地、同時に莫大な利益をあげることが出来
る。これに對し、オーケストラは「音」を生
産する工場「オーケストラ」自体が津々浦
浦まで出かけて、一回の演奏会をやる他はな
い。大阪と名古屋で同時に収入を得ることは
出来ない。放送とかレコードというマスメデ
ィアはあるが、それは演奏会ではなく、又、
多くの収入は期待できない。商売に「二八(二
ツバチ)」という言葉があつて、二月、八月
は売行きが香しくないそうだが、オーケスト
ラもこの例外ではなく、加えて四月が比較的
閑である。年度始めのため注文が少ないので
ある。そして、秋のシーズンでは、多忙を極
め、折角の演奏会の申込みを、涙を吞んで断
るのである。これが、生産工場なら閉鎖時も
ドンドン生産して需要期に備えるであらう。
しかし、演奏会は貯蔵が出来ない。オーケス

オーケストラの出演料

オーケストラの出演料は、指揮者、ソリス
ト、旅費等を除いて、二百五十万円から三百
五十万円止まりだが、その話をするとき世間の
人は「エッ、そんなに高いのですか」とい
う。でも考えても見て下さい。演奏会には必ず練
習日が要る。二日かかって一回の演奏会を百
人の音楽家がやったら、一人あたりいくらに
なるか、答は明白である。楽団員はすべて音
楽大学出身のエキスパートである。その集団
がオーケストラを編成していることを考えて
貰いたいのである。勿論、我々としては、喜
んで出演料を払って戴けるに足る、優れた演
奏をお聴かせする責任がある事はいうまでも
ないが。

オーケストラ名	所在地	創立年	音楽監督・常任指揮者等	楽団員数	事務局員数	備考
東京都交響楽団	東京	昭和40	(音楽監督・首席指揮者) 若杉 弘 (指揮者) 小泉 和裕	107	15	昭和40. 発足。同時に財団法人。
新星日本交響楽団	東京	昭和44	(名誉指揮者) 山田 一雄 (首席客演指揮者) オンドレイ・レナルド (指揮者) 星出 豊 現田 茂夫	73	11	昭和44. 発足。昭和56. 財団法人。
新日本フィルハーモニー交響楽団	東京	昭和47	(指揮者団) (首席指揮者) 小沢 征爾 (指揮者) 小泉 和裕 () 手塚 幸紀 () 山本 直純	90	12	昭和47. 発足。
東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団	東京	昭和50	(永久名誉指揮者) 森 正 (名誉顧問) 団 伊玖磨 芥川也寸志 巖 敏郎 (常任指揮者) 堤 俊作 (指揮者) 金 洪才	56	9	昭和50. 発足。

〈地方のオーケストラ〉

オーケストラ名	所在地	創立年	音楽監督・常任指揮者等	楽団員数	事務局員数	備考
群馬交響楽団	高崎	昭和20	(常任指揮者) 手塚 幸紀 (客員指揮者) デヴィッド・シャロウン ケーク・チャン・リム (指揮者) 湯浅 卓雄	63	9	昭和20. 高崎市民オーケストラとして発足。昭和22. 群馬フィルハーモニー・オーケストラと改名。昭和24. 財団法人。昭和38. 群馬交響楽団と改名。
大阪フィルハーモニー交響楽団	大阪	昭和22	(常任指揮者) 朝比奈 隆 (首席指揮者) 秋山 和慶 (指揮者) 大友 直人	94	11	昭和22. 関西交響楽団として発足。昭和25. 社団法人。昭和35. 大阪フィルハーモニー協会、大阪フィルハーモニー交響楽団と改名。
九州交響楽団	福岡	昭和28	(名誉指揮者) 安永武一郎 (首席客演指揮者) 小泉 和裕	63	11	昭和28. 発足。昭和50. 財団法人。
京都市交響楽団	京都	昭和31	(芸術顧問) 山田 一雄 (首席指揮者) 小林研一郎 (首席客演指揮者) デヴィッド・シャロウン (指揮者) 金 洪才	87	12	公立(京都市)
札幌交響楽団	札幌	昭和36	(桂冠指揮者) 岩城 宏之 (首席指揮者・ミュージック・アドバイザー) 秋山 和慶 (専属指揮者) 堤 俊作 小松 一彦 高関 健	70	7	昭和36. 札幌市民交響楽団として発足。昭和37. 札幌交響楽団と改称。財団法人。
名古屋フィルハーモニー交響楽団	名古屋	昭和41	(名誉指揮者) 外山雄三 (常任指揮者) モーシェ・アッモン	80	7	昭和41. 発足。昭和48. 財団法人。

日本のオーケストラ 世界のオーケストラ

日本のオーケストラ

日本のオーケストラ活動は、近年大変盛んになってきました。現在、全国でプロ・オーケストラは約20団体、アマチュアオーケストラは400余団体(アマチュア・オーケストラ連盟調べ)あります。

その中で、プロのオーケストラは、公立のものが1団体(京響)、その他は、ほぼ法人で組織されています。それらの団体は、おおよそ次の通りです。

〈東京のオーケストラ〉

オーケストラ名	所在地	創立年	音楽監督・常任指揮者等	楽団員数	事務局員数	備考
NHK交響楽団	東京	大正15	(名誉指揮者) ウオルフガング・サヴァリッシュ オットマール・スウィトナー ホルスト・シュタイン ヘルベルト・ブロムシュテット (正指揮者) 岩城 宏之 外山 雄三	112	22 (内 役員6)	大正15. 新交響楽団としてウオルフガング・サヴァリッシュオットマール・スウィトナーホルスト・シュタインヘルベルト・ブロムシュテット(正指揮者)岩城 宏之外山 雄三
東京フィルハーモニー交響楽団	東京	昭和13	(名誉指揮者) アルジェオ・クワドリ (常任指揮者) 尾高 忠明 (専属指揮者) 円光寺雅彦	93	11	明治43. に発足した名古屋松坂屋音楽隊が母体となって昭和13. 中央交響楽団として発足。昭和16. 東京交響楽団と改名。昭和23. 東京フィルハーモニー交響楽団と再改名。昭和27. 財団法人。
東京交響楽団	東京	昭和21	(音楽監督・常任指揮者) 秋山 和慶 (首席客演指揮者) 小林研一郎	89	11	昭和21. 東宝交響楽団として発足。昭和26. 東京交響楽団と改名。昭和31. 財団法人。昭和56改組、再び財団法人。
日本フィルハーモニー交響楽団	東京	昭和31	(創立指揮者・音楽監督) 渡辺 暁雄 (首席指揮者) 小林研一郎 (客演常任指揮者) イルジー・ビェロフラーヴェク エルヴィン・ルカーチ	78	14	昭和31. 発足。昭和44. 財団法人(47まで)。昭和63. 財団法人
読売日本交響楽団	東京	昭和37	(名誉指揮者) クルト・ザンデルリンク クルト・マズア (首席客演指揮者) ラファエル・フリューベック・デ・プルゴス (常任指揮者) ハインツ・レークナー	99	17	昭和37. 発足。昭和37. 財団法人

特集：オーケストラ

オーケストラ名	所在地	創立年	音楽監督・常任指揮者等
フィンランド			
ヘルシンキ・フィルハーモニー管弦楽団	ヘルシンキ	1882	パーヴォ・ベルグランド
オスロ・フィルハーモニー管弦楽団	オスロ	1919	マリス・ヤンソンス
スウェーデン			
スウェーデン放送交響楽団	ストックホルム	1923	エサ＝ベッカ・サロネン
スイス			
チューリッヒ・トーンハレ管弦楽団	チューリッヒ	1868	若杉 弘
スイス・ロマン管弦楽団	ジュネーヴ	1918	アルミン・ジョルダン
西ドイツ			
ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団	西ベルリン	1882	ヘルベルト・フォン・カラヤン
ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団	ミュンヘン	1893	セルジュ・チェリビダク
ハンブルグ・フィルハーモニー管弦楽団	ハンブルグ	1896	ハンス・ツェンダー
バイエルン国立歌劇場管弦楽団	ミュンヘン	1911	ヴォルフガング・サヴァリッシュ
フランクフルト放送交響楽団	フランクフルト	1937	エリアフ・インバル
バンベルク交響楽団	バンベルク	1945	ホルスト・シュタイン
北ドイツ放送交響楽団	ハンブルグ	1945	ギュンター・ヴァント
ベルリン放送交響楽団	西ベルリン	1946	リッカルド・シャイー
シュトゥットガルト放送交響楽団	シュトゥットガルト	1946	ネヴィル・マリナー
ケルン放送交響楽団	ケルン	1947	ガリー・ベルティニ
バイエルン放送交響楽団	ミュンヘン	1949	コリン・デーヴィス
オランダ			
アムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団	アムステルダム	1888	リッカルド・シャイー
ロッテルダム・フィルハーモニー管弦楽団	ロッテルダム	1918	ジュームス・コンロン
ベルギー			
ベルギー国立管弦楽団	ブリュッセル	1832	ジョルジュ・オクトール
フランス			
フランス国立管弦楽団	パリ	1934	(ロリン・マゼール)
パリ管弦楽団	パリ	1967	ダニエル・バレンボイム
リヨン管弦楽団	リヨン	1969	セルジュ・ボド
ストラスブール・フィルハーモニー管弦楽団	ストラスブール	1972	テオドル・グルシュバウアー
トゥールーズ・カピトル劇場管弦楽団	トゥールーズ	—	ミ歇尔・ブラッソン
イタリア			
ミラノ・スカラ座管弦楽団	ミラノ	1778	リッカルド・ムーティ
聖チェチーリア音楽院管弦楽団	ローマ	1886	—
スペイン			
スペイン国立管弦楽団	マドリッド	1940	ヘスス・ロペスコボス
オーストリア			
ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団	ウィーン	1900	(クラウディオ・アッパード)
ウィーン交響楽団	ウィーン	1842	ゲルト・アルブレヒト
オーストリア放送交響楽団	ウィーン	1936	ローター・ツァグロセク
イスラエル			
イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団	テルアヴィヴ	1936	ズービン・メータ
チェコスロヴァキア			
チェコ・フィルハーモニー管弦楽団	プラハ	1894	ヴァツラフ・ノイマン
ブラハ交響楽団	プラハ	1934	イルジ・ビエロフラーヴェク
ハンガリー			
ハンガリー国立交響楽団	ブダペスト	1923	小林研一郎
ポーランド			
ワルシャワ・フィルハーモニー管弦楽団	ワルシャワ	1901	ガジエシユ・コルド
ルーマニア			
エネスコ国立フィルハーモニー	ブカレスト	1868	イオン・ヴィイク
ユーゴスラヴィア			
ザグレブ・フィルハーモニー管弦楽団	ザグレブ	1920	大野 和士
東ドイツ			
ドレスデン・シュターツカペレ (ドレスデン国立歌劇場管弦楽団)	ドレスデン	1548	ハンス・フォンク
ベルリン・シュターツカペレ (ベルリン国立歌劇場管弦楽団)	東ベルリン	1742	オットマール・スウィトナー
ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団	ライプツィヒ	1781	クルト・マズア
ソ 連			
レニングラード・フィルハーモニー交響楽団	レニングラード	1882	—
モスクワ放送交響楽団	モスクワ	1930	ウラディミール・フェドセーエフ
ソヴィエト国立交響楽団	モスクワ	1936	エフゲニ・スヴェトラノフ
ソヴィエト国立文化省交響楽団	モスクワ	1982	ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー
オーストラリア			
シドニー交響楽団	シドニー	1934	チャールズ・マッケラス
メルボルン交響楽団	メルボルン	—	岩城 宏之

(文化庁芸術課芸術調査官 池田 温)

特集：オーケストラ

オーケストラ名	所在地	創立年	音楽監督・常任指揮者等	楽団員数	事務局員数	備 考
(名古屋フィルハーモニー交響楽団)			(指揮者) 手塚 幸紀 飯守泰次郎 高関 健 岡田 司			
山形交響楽団	山 形	昭和47	(首席指揮者) 渡部 勝彦 (正指揮者) 村川 千秋	42	7	昭和47. 発足。
広島交響楽団	広 島	昭和47	(名誉音楽監督) 渡辺 暁雄 (音楽監督・常任指揮者) 高関 健	55	8	昭和38. 広島市民交響楽団として発足。昭和44. 広島交響楽団と改名。昭和47. (社)広島交響楽協会として活動。
宮城フィルハーモニー管弦楽団	仙 台	昭和48	(音楽監督) 芥川也寸志 (常任指揮者) 観山 和明 (客演指揮者) 小林研一郎	55	6	昭和48. 発足。 昭和53. 社団法人。
神奈川フィルハーモニー管弦楽団	横 浜	昭和53	(常任指揮者) 黒岩 英臣	57	6	昭和45. ロリエ管弦楽団として発足。昭和46. 神奈川フィルハーモニー管弦楽団と改名。昭和53. 財団法人。
関西フィルハーモニー管弦楽団	大 阪	昭和57	(名誉指揮者) 小松 一彦 (常任指揮者) 黒岩 英臣 (指揮者) デビッド・ハウエル	45	7	昭和45. ヴェール・フィルハーモニックとして発足。昭和57. 関西フィルハーモニー管弦楽団と改名。改組。

(昭和63年9月1日現在)

世界のオーケストラ

世界のオーケストラ(プロ)の分布図をみますと、当然ながら誕生の地ヨーロッパに多く、その他はヨーロッパ文明が伝えられたアメリカ等多くの楽団があります。

これらのオーケストラは、日本のように一都市に集中せず、ほぼ各州の都市に点在しています。(ただしイギリスだけは、日本のように、やや首都集中的な傾向を示しています。)

また、オーケストラの種類別で見ますと、ヨーロッパには、アメリカ等に比べ放送局と歌劇場所属の優れたオーケストラが多くみられることが特徴的といえるでしょう。

次に、これらのオーケストラの中から、放送やレコードなどで、なじみの多い団体をいくつかご紹介しましょう。

オーケストラ名	所在地	創立年	音楽監督・常任指揮者等
アメリカ			
ニューヨーク・フィルハーモニック	ニューヨーク	1842	ズービン・メータ
セントルイス交響楽団	セントルイス	1880	レナード・スラトキン
ボストン交響楽団	ボストン	1881	小澤 征爾
シカゴ交響楽団	シカゴ	1891	ゲオルグ・ショルティ
フィラデルフィア管弦楽団	フィラデルフィア	1900	リッカルド・ムーティ
サンフランシスコ交響楽団	サンフランシスコ	1911	ヘルベルト・ブロムシュテット
クリーブランド管弦楽団	クリーブランド	1918	クリストフ・フォン・ドホナーニ
ロサンゼルス・フィルハーモニー管弦楽団	ロサンゼルス	1919	アンドレ・プレヴィン
カナダ			
トロント交響楽団	トロント	1923	アンドルー・デイヴィス
モントリオール交響楽団	モントリオール	1934	シャルル・デュトワ
イギリス			
ロンドン交響楽団	ロンドン	1904	マイケル・ティルソン＝トーマス
BBC交響楽団	ロンドン	1930	ジョン・プリッチャード
ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団	ロンドン	1932	—
フィルハーモニア管弦楽団	ロンドン	1945	ジュゼッパ・シノーポリ
ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団	ロンドン	1946	ウラディミール・アシュケナーズ

編 集 後 記

音楽を鑑賞していると、現代社会の喧騒からしばし解放される気がします。コマージュにせよカラオケにせよ、音楽に対する需要は日々増す一方です。ところで、九月中旬に始まったソウルオリンピックも間もなくフィナーレを迎えます。スポーツがそうであるように、文化についてもまた、頂点のレベルを高めること、裾野を広げることが二つの重要な施策の柱となっています。芸術祭が前者の例とするならば、国民文化祭は後者の例と言えるでしょう。

十月一日、芸術祭はNHK交響楽団による「オーケストラへの誘い」で幕を開けます。頂点を極めた高度な芸術は、そこで発表の場を得るのです。芸術の秋。単に喧騒からの脱皮というだけではなく、もっと積極的に芸術に触れてみたい気がします。(〇)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課
TEL(〇三)三六八二二四(代表)

「文化庁月報」十月号

(通巻第二四二号)

昭和63年10月25日印刷・発行

編集 文化庁

〒100 東京都千代田区霞が関3丁目2番2号
発行所 株式会社 きょうせい

本社 千代田区中央区銀座7丁目4番12号

営業所 千代田区新富区西五軒町52番地

電話 (〇三)三六八二二四(代表)

振替口座 東京 九一六一番

印刷所 協行政学会印刷所

定価 一八〇円(送料四五円)
年間購読料 二、一六〇円(送料共)